

大阪府教育委員会と府教育委員への緊急の申し入れ

「高槻南高校を統廃合により廃校とする旨の府教育委員会議決定(01・11・16)を撤回、もしくは全面的な再検討を行い、12月大阪府議会において「大阪府立高等学校等条例一部改正」(案)の提案を行わないこと、及び平成15年度においても、ひきつづき同校新1年生の生徒募集を継続すること」を求める緊急の申し入れ

(申し入れの趣旨)

1年前の2001年8月30日、貴教育委員会は「府立高校再編整備第1期実施計画、第3年次対象校案」を発表し、高槻南高校を実質的に廃校とする方針を示しました。この不当きわまりない廃校案に対して、生徒、保護者、現旧教職員がひとつになり、その撤回を求めた反対運動がすぐさま開始されました。この廃校反対運動が、様々な連帯の輪を広げながら、想像を超える高揚を見せたのは今も記憶に新しいところです。

生徒たちの自発的行動から始まった街頭における反対行動は、3か月間、ほぼ毎日継続して行われ、地域の各駅頭は、生徒や保護者、関係教職員の廃校反対を訴える声が連日、聞かれるようになりました。数度にわたる集会、デモ行進にも生徒・保護者・教職員を中心に、多くの人々が参加しました。議会請願活動、生徒による府教委への要請活動、府教委に対して説明を求める場の設定など、多彩な反対運動も展開されました。

こうした取り組みの中で、廃校反対署名は、公立高校単体の廃校反対署名としては実に異例なほど多い16万筆の賛同を得るほどの大きな発展となりました。これだけの反対世論の高まりは、この廃校案の不当性と非教育性を明白に証明するものです。

あくまで廃校案の撤回と納得のいく説明を求める私たちに対して、貴教育委員会は、「これは廃校ではありません。統合による発展です」と、府条例と実態を無視した無責任な弁明を繰り返し、納得のいく説明や合理的な根拠を一切示すことができないまま、昨年11月16日、ついに高槻南高校廃校案を正式決定としたのです。多くの府民・市民、教育関係者が、「この決定は明らかにおかしい」と今も批判をしているのです。少なくとも、2学区住民なら考えられないようなこの学校の廃校決定という暴挙を、平然と強行することが出来たのは、貴教育委員会と府教育委員の皆さんが、結局は府立高校教育を真剣に考えようとしなかったからだといわざるを得ません。もたらされた結果へのみなさんの責任はきわめて重大です。「廃校決定」の大阪府教育委員会議では、「(高南は)府立高校の象徴の一つだと、公立高校として本当にうれしく思った。いろんな課題を抱えた府立高校の中で貴重な存在ではないかと思った。」(府教育委員)と、高槻南高校を「府立高校にあってかけがいのない学校だ」と評価する声もありながら、その教育委員も含めて全会一致で「廃校決定」が強行されました。こうまでして高槻南高校を廃校にする背景と理由は何か？今、厳しく問われています。高槻市当局も貴教育委員会の「決定」についてこう語っています。「計画案を策定され公表されるまでの間に地元市に対して、一度の事前協議もなかったことにつきましては、まことに残念できわめて遺憾(市長)」、「府教委は高槻市民のことなんか何も考えていない(助役談話)」と痛烈に批判しています。

地元市や市民の協力でできた府立高校を「廃校にする」という決定が、地元市当局と何の協議も行うことなくなされるに至った背景と理由は何か？誠実に答える責任が、貴教育委員会にはあります。この不透明さの中に、この廃校決定の最大の問題があると言えるのです。去る1月10日、行政不服審査法に基づき貴教育委員会に対して行った私たち高槻南

高校関係者の「異議申し立て」に対しても、貴教育委員会は、その申し立ての中で出された「廃校決定の不当性」を裏付ける論拠や批判に対して、何一つ反論、説明、回答を行うことなく「(不服申し立て自体を)不適法であるのでこれを却下する」と、門前払いの決定通告をおこなうなど、廃校理由を明確に説明することをかたくなに拒んでいます。去る5月の私たちがおこなった公開質問状に対する府教育委員会回答でも、私たちが質(ただ)した高槻南高校を廃校にする背景と理由追及に対して、建前論に終始し、具体的に触れようとしませんでした。

このような中で、この7月以降、私たちがやむにやまれず行った情報公開請求においても、廃校決定経過を糾明する行政文書を「作成していない」「取得していない」「管理していない」と無責任を決め込み、肝心の文書を「不存在」として「非公開」決定としています。「開かれた教育行政」の基本を捨て去った、貴教育委員会事務局の独善的で不誠実、かつ欺瞞的な態度の数々は、公正な行政施策の遂行と展開を著しくゆがめるものです。まさに府民に対する背信行為です。府教育委員の皆さんには、大阪府民を代表してこのような事務局の姿勢を糾す責任があるはずです。

皮肉にも府教委案の確定以後、高南が廃校対象となるような条件をいっさい持たないばかりか、「高校改革で目標とすべき文武の調和のとれた学校」であるということが、府民の眼にますます明らかになってきています。今年3月卒業した27期生の進路実績でも、国立大学医学部への合格者を出すなど、国公立大学等の各方面で良好な成果をあげたということです。またこの夏、軟式野球部は、大阪大会での優勝を果たし、全国大会に進出、ベスト8にはいる活躍ぶりです。国体出場を決め、府民の喝采を浴びました。その中で、全国紙やスポーツ紙で、廃校問題で発言し、がんばる野球部員生徒のことが取り上げられています。これらは、廃校決定にもかかわらず、高南生徒のエネルギーに示される「高南の生命力」がいぜんとして健在であるということを証明しています。これは、また高南廃校決定の不当性を浮き彫りにしています。このような高校を潰して、なんの高校改革でしょうか?「廃校ではない、発展です」などという詭弁で府立高校教育を台無しにしておいて、自らの教育的良心の内なる想いが癒されるのでしょうか?お尋ねしたいと思います。

高南の伝統は30年前、市民と高槻市当局の協力によって開校されて以来、地域の人々に支えられながら、脈々と築き上げてきたものです。私たちは、この素晴らしい高南が、合理的な理由や学校関係者のいっさいの合意のないままに廃校にされてしまうという決定に対して、今なお大きな不信と怒りをもつものです。

本年6月27日の高槻市議会で、昨年に引き続き再度採択された意見書においても、「この統廃合問題について高槻市と府教育委員会が改めて協議を行うよう」にこの決議が与野党を超えてなされています。貴教育委員会と府教育委員の皆さんには、このような高槻市民と市議会の意見と要望を真剣、かつ謙虚に受け止める責務があるはずです。

とりわけ府教育委員のみなさんは、「政策決定上の判断の基礎」の多くを官僚の恣意的な説明や資料にゆだねるのではなく、生徒・保護者・教職員を含む学校現場と府民の切実な要望に直接耳を傾け、施策に最大限これらを反映させることによってこそ、その見識と使命を果たすことができるのだと期待されています。高南問題は終わってはいないのです。これから重大な局面を迎え、みなさんの教育見識や良心が問われてくるのです。

以上の趣旨を踏まえ、私たちは、以下の2点について緊急の申し入れを行うものです。

(申し入れ事項)

一、 本年11月開催予定の府教育委員会会議において、高槻南高校を統廃合により廃校と

する旨の府教育委員会議決定(01・11・16)について再審議の上で撤回、もしくは「島上単
独改編、校地・校舎問題」等も含めた全面的な再検討と見直しを行い、当分の間、関連する
『大阪府立高等学校等条例一部改正』(案)の提案を大阪府議会に対して、行わないこと。

二、 上の申し入れ事項を踏まえ、平成15年度においても、ひきつづき高槻南高校新1年生
の生徒募集を継続すること。

2002年10月21日

団体名 高南応援団
代表者名 佐藤 雅紀

大阪府教育委員会
教育委員長 熊谷信昭 様

教委高改 第 42 号
平成14年11月21日

高南応援団
佐藤 雅紀 様

大阪府教育委員会
教 育 長

大阪府教育委員会と府教育委員への緊急の申し入れについて(回答)

平成14年10月21日付けで申し入れのあった標記について、下記のとおり回答しま
す。

記

大阪府教育委員会では、生徒一人ひとりが、興味・関心、能力・適性、進路希望等に
応じて、目的意識をもって生き生きと学べるよう、府立高等学校の「特色づくり」を進めて
います。

また、大阪府内公立中学校卒業生数は、平成14年にはピーク時であった昭和62年の
14万8千人の半分近くになっており、今後も減少が続きます。生徒数の減少により、学
校の小規模化が進みますと、学校行事、生徒会活動や部活動等が十分に行えないなど、学
校の活力が低下します。また、生徒の興味・関心等に対応した多様な科目展開が困難にな
るなど、教育活動に支障が出るのが懸念されます。このため、生徒減少期を、教育環境・
教育条件など教育の質的向上を図る好機として捉え、府立高等学校の特色づくりとあわせ

て、適正な規模の確保、適正な配置の観点から再編整備を進めています。

昨年度の第1期実施計画第3年次実施対象校の選定にあたりましても、このような方針の下に、生徒減少の著しい高槻市内において、府立高校の特色づくりの取組み実績、特色ある学校の地域バランス、志願状況、地域的な近接性、交通の利便性、施設状況等の客観的条件を総合的に判断して、島上高校と高槻南高校を統合整備による特色づくりの対象校とし、特に交通の利便性から、新校は現島上高校の校地校舎を使うことを決定したものです。

府教育委員会におきましては、両校の統合整備によって誕生する槻の木高校(仮称)が、両校の実績や伝統などを引き継ぎ、「入りたい学校」として多くの生徒から支持される高校となりますよう、来年4月の開校に向けて、引き続き全力をあげて取り組んでまいります。